漢字簡略化の歴史的意義

―中国文字改革運動から―

曽　　徳　興

<目　次>

一．序　　文……69

二．漢字の変遷……70
(一)漢字の起源……70
(二)古文→小篆……74
(三)小篆→隷書……76
(四)隷書→草書……77

三．漢字簡略化の歴史的基礎……79
(一)簡略化は漢字構造の発展方向である……79
(二)簡体字は中国史上の各朝号にわたって流行している……81

四．漢字簡略化運動……82
(一)字数の制限……82
(二)混乱し易い字の整理……84
(三)筆画数の減少……85

五．漢字簡略化方案の公布……88
(一)漢字簡略化方案草案の発表……88
(二)漢字簡略化方案の正式公布……90
(三)漢字簡略化方案の分析……90

六．結　　論……93

一．序　　文

1955年に「漢字簡略化方案草案」が中国で発表され，全国人民の討論にゆだね

られてから，漢字簡略化の問題がクローズアップされ，暫らく静かだった文字改革論争に再び火をつけた。

しかし，漢字簡略化については，今日になってから問題化されたのではなくて，昔からその問題が存在していた。漢字の歴史を見ると，早々と殷周古文の時代から同字異体の現象が現われた。その間正体字は次第に異体字に取って代わられて行くが，その異体字と正体字との区別は，ただ単に簡単と繁雑との違いにすぎない。筆画の簡単なものは繁雑なものに対して，今日の言葉で表現すれば，すべて「簡体字」と言っても差しつかえない。故に漢字簡略化の問題は漢字ができた時から存在していた。言い換えれば，漢字の変遷は漢字簡略化の過程であり，漢字の歴史は漢字簡略化の歴史でもあるといっても過言ではない。

この論文は漢字の変遷，即ち漢字の起源から「漢字簡略化方案」の公布までのプロセスを歴史的観点から考察し，漢字簡略化の歴史的事実を究明し，漢字の発展又は漢字の前進運動の方向を理論付けようと試みるものである。

又1956年「漢字簡略化方案」が正式に発布されたと同じ年に「漢語拼音(表音)方案草案」(漢字をローマ字化する発想）も出され，国務院で決議された。前者は簡略化運動，後者は表音化運動，相矛盾するこの二つの運動が時期を同じくして推進されることは，一体どういう理由によるものであろうか，これはローマ字論者の主張を引用して，両者の関係を明らかにする。(近代における漢字簡略化の思想背景にはローマ字化問題が大きく潜んでいる。ローマ字化問題については，同論叢15巻2号の中で詳しく論じてあるから，ここでは軽く触れるだけにする)

二．漢字の変遷

(一)　漢字の起源

どんな歴史にしても，それを論ずるには先ず起源から始めるように，漢字の変遷を論ずるにも漢字の起源から論じなければならない。しかし，それは容易なことではない。なぜならば，われわれはもし科学的な観点から物事を見る場合，必ず人間の目で確かめられるものでなければなかなか信じないからであり，漢字の

起源には伝説が数多いということもあって，われわれはその伝説を歴史として見なすことができないからである。

千八百余年前，「説文解字」の著者である許慎氏は，かつて，伝説をもとにその本の序文にした。それによれば，最初伏羲（庖羲）氏は天文地理を観察して「八卦」を描いた[1]。その後神農氏は「結縄」[2]を考え出した。それから黄帝の時代になってから史臣である倉頡氏が鳥獣の足跡をヒントとして「書契」（文字）を創造した[3]。

「八卦」について—：一体「八卦」はどういうものなのか，周易が作ったものによれば，その組合わせは64組である。しかし，その原形の卦は８組しかない。つまり乾卦☰，坤卦☷，震卦☳，艮卦☶，離卦☲，坎卦☵，兌卦☱，巽卦☴，である。八卦を書く時に八句の言葉がある：「乾三連」「坤六段」「震仰盂」「艮覆碗」「離中虚」「坎中満」「兌上缺」「巽下断」。易緯乾鑿度は☰は天，☷は地，☳は雷，☶は山，☲は火，☵は水，☱は沢，☴は風，それぞれの古字であると思っていた[4]。白河次郎，国府種得両氏が書いた「支那文明史」の中で，古文の籀篆の字の形体は丸いが，八卦は四角い，これはバビロンの楔形文字の変形したものであるから，漢民族は西方アジアより移住したことを論じているが，その中で白河，国府両氏も八卦の符号は文字の一種であることを認めている[5]。

しかし，周易の説によると，卦は勿論「乾為天」，「坤為地」，「震為雷」，「艮為山」，「離為火」，「坎為水」，「兌為沢」，「巽為風」という八種類それぞれの代表する事物があるが，八卦は八つの字であるとは言わなかった[6]。しかも伏犠氏はこの八つの字だけを作ったが，これだけでは生活の中で使うのに足りるわけはない。したがって八卦は文字である説は理論的には弱い。

「卦」という字はもともと「圭」であり，占いに用いるために「卜」を付け加えて「卦」になった。説文解字は「圭は瑞玉である」といっている。これは玉編の「珪」のもとの意味である。古文では圭と珪は同音であるため，珪の代りに圭を借用したわけである。圭の字は二つの土からなり，つまり土から造った二つのものであり，二つとも凹凸両面を持っている。原始社会の人はこの簡単な器具を

用いて神の前で振り落して占いをしていたに違いない。これは現代中国の南の沿海と台湾一帯の土地廟（土地の神のやしろ）に使っている「筊杯」と同じ作用を持っている。筊杯はほとんど竹の根で作ったものであるから竹冠を付けているが，「珓」と同意語で，もっとも高級な品質である玉で作られたものもある。二つの珓杯を振り落して，もし両方とも表（凸凸）又は両方とも裏（凹凹）になったら「一」を記し，一表一裏（凸凹）になったら「- -」を記する。連続三回投げて三画で表わすとその変化は☰☳☵☲☶☴☱☷ 8種類の範囲を出ない。これがいわゆる八卦である。古代の人はこのような筊杯を土で作ったので「圭」の字を採り，又占卜に用いたため「卜」を付け加えて「卦」の字にしたのである。したがって八卦は古代の人が神の前で占う一種の記号にすぎない[7]。

八卦が上述のようなものであることが分かれば，八卦が文字ではないこともおのずと明らかである。したがって八卦は一体伏羲氏によって描かれたのか，伏羲氏の時代にこの物がもうすでに存在していたのか，又はそれは結縄よりも先或いは後に現われたのか……等の問題を究明する必要もない。なぜならば，それはもう文字学との関係が薄くなったからである[8]。

「結縄」について一：中国古書の中に古代結縄の事について多く書かれている。たとえば，周易繫辞下伝には「上古結縄而治」と言っている。荘子胠篋編にも古代容成氏等十二時代は「民結縄而用之」と言っている。許慎氏は「説文」の序文の中にも「神農氏結縄為治」と言っている。周易正義疏繫辞は「事大，大結其縄；事小，小結其縄」と言っている[9]。周易集解は「古者無文字，其有約之事，事大，大結其縄，事小，小結其縄；結之多少随物衆寡……」と言っている。厳如煜氏も次ぎのように言っている「苗民不知文字……性善記，懼有忘，則結于縄」。これらの伝説の中からわれわれは中国の古代には「結縄」ということは確かにあったと推測できるが，しかし使ったものは実物であって，符号ではなかった。勿論表示能力も文字に及ばない。広義の解釈から見れば，文字も一種の表示意思であり，記憶を助ける記号であるから「結縄」というものも文字の始まりのきっかけであるといってもよいかも知れない。しかしそのもの自体が文字であると言って

しまうことは，あまりにも強引な論断である。章炳麟氏が「それは持論不根である」と批判したのはそのためであろう[10]。

倉頡氏が文字を創造したことについて一：「説文解字」によれば，黄帝の時代，史臣倉頡氏が鳥獣の足跡のヒントで「書契」（文字）を創造した。しかし，文字は人民大衆が集団で作ったものであり，決していち個人の力で創造できるものではない。したがって，倉頡氏が文字を創造したことも一つの伝説にすぎない[11]。

文字の真跡のことに触れると，それは中国の漢民族が一番誇りに思っているものであろう。なぜならば，彼らは三千余年前に刻まれた文字の器物をいまでも保存しているからである。それらの文字はほとんどがまだはっきりと見分けられるので，その後の文字の研究に非常に明るい材料を与えてくれた[12]。

文字が刻まれた古代の器物は次ぎの二種類に区分することができよう。

1. 殷代の文字が刻まれた亀甲と獣骨，その上に刻まれたのはほとんど「卜辞」[13]であるが，「記事辞」も少しはある。これらの文字に対して現在は「甲骨文」[14]と呼んでいる。その年代は殷朝の皇帝武丁（1324ＢＣ～1291ＢＣ？）にまで溯及することができよう。つまり今から三千二百余年前である。これらの亀甲獣骨は1899年（清朝光緒25年）に始めて発見され，その後絶えず発掘され，今はもう十六，七万枚まで増えた。その中に含まれている違う文字は二千余あり，すでに読解されたものは一千余字ある[15]。

2. 殷，周二代の文字を刻んだ各種の青銅器，その上に刻まれた文字を現在は「金文」と呼び，前は「鐘鼎文」[16]とも呼んでいた。このような銅器は早ばやと漢朝の頃に発見され始めたが，数量は極く僅かで，当時このような文字を知っている人も少なかった。宋朝にきてから発見された件数が増え，羅振玉氏が編さんした「三代吉金文字」の時代までくるともう4831件に上った。その中で読解されたものは1808字，まだ謎のままとなっているものが1165字ある[17]。

以上二種類の文字を合わせて「甲金文」と称し，又は混合して「殷周古文」[18]と呼んでもよい。現在，このような文字はわれわれが目で確かめられる一番古い文字の真跡である。われわれが漢字の変遷又は漢字簡略化の歴史を論じようとす

るならば，ここから始めるべきであろう[19]。

(二) 古文から小篆へ

殷周の古文から秦朝の小篆までの変化は，漢字字体変遷の一番重要な一歩である。なぜならば，漢字は「古体」から「今体」に移り変った中で小篆が重要なキーポイントであるからである[20]。もしこのような字体が発見されなかったら，われわれは殷周古文の謎を解けることはできない。そうするとこの三千五百年の漢字史の長い道筋を捜し出すことは困難を極めたであったろう。

古文から小篆に変わったのは，決して突変ではない。それは六百余年にわたりゆっくりと変化してきた過程である[21]。

小篆は大篆から簡略化された一種の字体であるが[22]，しかし現在大篆の真跡を見られるであろうか。勿論見られることができる。それはいわゆる「石鼓文」である。

「石鼓文」[23]とは，十個の「饅頭」（まんじゅうの一種）と同じ形の石鼓の上に田圃や狩猟のことを記載した韵文を刻んだものである。これらの石鼓は唐の初期に陳倉（現在陝西宝鶏県）で発見されたものである。昔，人々がそれらは周宣王時代（827BC～782BC）の遺物であると信じていたが，近頃，学者の間ではそれは秦襄公時代（777BC～766BC）或いは秦文公時代（765BC～716BC）のものであると見なしているから信憑性が割に高い。これらの石鼓の上に刻まれた文字を考察してみれば，それは確かに殷周古文とは少し異るし，又小篆とは割に近い。したがってわれわれはこのような文字こそ大篆であり，籀文でもあると信じ込むようになった[24]。

言うまでもなく大篆は漢字の一つの変遷過程にすぎず，特別に創造された文字ではない。しかし，それは漢字変遷史において，特殊性を持つ字体を成したことは確かである。その特殊性として次ぎの二点を挙げられよう。

1. 線状化は完成度に達している—：大篆はもう完全に線状化にしているから，「篆文」又は「籀文」とも呼ばれるのである。「説文」によれば「篆は引書である」。

「引書」とは線状に引くという意味合いから「籀」と呼ぶのである。「籀」は「抽」であり，「抽」も「引」という意味である。しかも線が非常に柔軟で均衡がとれている。殷周古文の様な太さと不均衡なものとは異なるものである[25]。

2. 構造は整っている一：絵の原形から更に遠く離れて，四角い字の基礎を築き上げた。

この二つの特徴はこのような字体が「規範化」された字体であることを意味するものであるから，勿論殷周古文の中での異体字もついでに消滅してしまった[26]。

しかし宣王以降六百余年間において，秦国の国力がたえまなく膨脹し，文化面においてもそれに見合うような発展が見られ，したがって字体もいつの間にか変ってしまった。この変化の結果，小篆が現われたのである[27]。

しかし大篆から小篆へは一体どういう変化を辿ったのであろうか。われわれは「説文」が集めた二百余の籀文（大篆）を小篆と比較すればその変化の仕方がわかるであろう。

1. 重複を省く。
2. 形の偏旁を省略する。
3. 音声の偏旁を省略する。
4. 簡単な偏旁で以って繁雑な偏旁に取って代わる。
5. 形声字で以って表意字に取って代わる[28]。

「説文」に集められた二百余の籀文（大篆）は皆小篆とこのような対照を成している。故にわれわれは，大篆から小篆に変化したのは基本的には一つの簡略化の過程であることがわかる。「大」から「小」に名称を変えたのもその理由である。この過程において重複を省いたり，偏旁を省いたりすることは非常に進歩的な簡略化の方法であることが理解できよう。又この進歩があるからこそ秦始皇帝の時代になってから，その小篆を以って「不与秦文合」（秦文と合わない）六国の異なる文字を統一することが可能であった。この文字統一の仕事は中国文化史上において極めて重大なことである。理屈で言えば，十数年しか持たない秦王朝（221BC～207BC）がこのような難しい且つ巨大な仕事に従事することは，非常

に成し逐げにくい。しかし結果的にはそれが完全に成功したわけである。これはその文字統一の仕事は完全に政治の力に頼ったものではなくて，小篆自身が持っている優越性のお陰で成し逐げ得たものであることを物語っている[29]。

（三） 小篆から隷書へ

隷書の由来について，漢時代の民間には一つの伝説があった。つまり隷書は秦始皇帝が程邈氏に作ってもらったもので，これは大篆は周宣王太史籀によって作られ，小篆は李斯氏によって作られた伝説と同じ事である[30]。しかし，この一連の伝説について，われわれ現代人はそれを信じることはできない。なぜならば，どのような字体であろうとも，決していち個人の力で創造できるものではないからである[31]。

小篆から隷書への変化の第一歩は一種の書法上の変化に過ぎない。その中で一番目立つ現象は婉曲の線状から平直の線状へ，稜角のないものから稜角のあるものへと変って行くことである。その変化を促した原因は言うまでもなく「簡単」と「書く速度」を求めるところにある[32]。

隷書はもともと単に小篆の簡略又は拙劣な書き方に過ぎない。その構成も又もともと小篆と異なることはない。しかし庶民の手から士大夫階級[33]の手に伝ってからの隷書は均整と美感の方面へと発展し，西漢二百余年を経，東漢になってからようやくその発展が完成して一種の書法価値のある字体になった[34]。以降漢の末期，魏の初期（三世紀初期）になってから真書（楷書）が生れた。真書は「正書」又は「今隷」（漢隷と区別するため）とも称し，現在の楷書に至るまでずっと通用してきたのである。このように長期間にわたって発展した結果，隷書（漢隷，今隷とも含む）は結局一種の特徴を持つ字体となり，同時にその構成も又小篆との相異点が多くなってきた[35]。

隷書の特徴は小篆の線状を筆画に変えるところにある。たとえば，晋時代の衛夫人のいわゆる「七条筆陣」は一丶ノ丨乀乁冂である。又唐の張懐瓘のいわゆる「永字八法」[36]を現代の名称で呼ぶと①「側」：点，②「勒」：横画，

③「努」：縦画，④「趯」：はね，⑤「策」：短い横画，⑥「掠」：左払い，⑦「啄」：短い左払い，⑧「磔」は右払い，等にあるが，そのほか⑨「乚冂」：折り曲げを加えると九種類ある。現代漢字の筆画をよく見ればこの九種類の範囲を出ない，この九種類の筆画の源は不一致であったため隷書の筆画と小篆の線状の間に対応関係を捜し出すのはそれほど容易ではない。これは小篆から今隷までの変化は数多くの段階を経てきたことを物語っている[37]。

（四） 隷書から草書へ

衛恒氏の「四体書勢」によれば「漢興而有草書，不知作者姓名，至章帝時（紀元76～88年）斉相杜度，号善作之。」そうすると，「章草」この名称は章帝から由来するものである。しかし張懐瓘氏の「書断」によると「章草者，漢黄門令史游所作……史游即章草之租也。」つまり史游こそ章草の生みの親である。

衛，張両説の異なる原因は，字体と書法を混同して一緒に論じたところにある。字体は決して個人が創造出来るものではないので，勿論それはだれだれが作ったとは言えない。書法はある書道家がその持っている特異な風格が，その後その他の人々の模倣によって一派を形成し，それぞれの一派の風格の名称が生じるということである。したがって張説よりも衛説の方が信憑性が高い。衛恒氏は先に「漢ができた時に草書も見られた」と言っておいて，後に「章帝の時代になってから草書をうまく書ける杜度が現われた」と言っているので，これは明らかに字体から書法までを説明しているに違いない。彼は又「その後崔瓊，崔実両氏とも杜度氏に学び，のちほど両氏が草聖と呼ばれるようになった」と言った[38]。したがってこの一派の書法が形成され，その起源は章帝時代であることから，後世の人々はそれを「章草」と呼ぶことになった[39]。

われわれも又漢時代の「鼎」「詔版」[40]の上に刻まれた文字から「説文・叙」の中に書いてある「漢興有草書」の一句を完全に信じ，草書は漢隷と時期を同じくして現われていた一種の字体であることを認識することができよう[41]。

明らかに，草書の字体は「早く書く」という速度の要求のもとに自然的に生れ

たもので，その構成上は大体隷書とそれほど変わらないが，急いで書いたり，或いは粗末に書いたりしたため，隷書の整然さが失われてしまった。王愔氏が「解散隷体」と言ったのは正にこの意味である。

もし，隷書は秦時代の庶民が使っていた文字であると言うならば，草隷又は草書は漢時代の庶民が日常生活で使っていた文字であると言っても過言ではない。漢時代の人が比較的荘厳な彫刻と石碑に隷書を用いる以外には，すべてこのような字体（草書）を使用していたに違いない[42]。

隷書から草隷に変化した時から連綿体が生れた。これは漢の時にあるさまざまな墓や碑文に見られる。「章草」が「草」と呼ばれた原因はその連綿なところにある。例えば，皇象氏が書いた「急」という字は二筆だけで済み，「別」という字は一筆しか使っていない，いわゆる一筆書きである[43]。

理屈で言えば，このような「一筆書き」はもっとも便利で使い易い字体であり，それを使用する人も一番多いはずだが，事実上そうではないようであった。なぜならば，この種の字体は一般庶民によって創造されたものではなくて，暇のある士大夫階級がそれを遊ぶもの，つまり藝術品として扱っていたものであるからである。士大夫階級がこの字体を創造する時はいつも自分の意のままに勝手に筆を振舞い，一定の構造なんかに基いていなかった。例えば，よく知られている王羲之氏のかいた「書」という字体は五種類もある。故にこのような字体は唐時代の張旭氏の「狂草」まで発展すると，それは正さに「道士」（道教の僧）[44] が変な呪文を書いたような狂った字体になってきた。もともと暇のある士大夫階級がこの様な字体を創造したのは，ただ単に文字を借りて線状美を表わすために過ぎない。これは彼らの階級の中では成功したこととは言えるだろうが，しかし，このような美は一般庶民が観賞できるものではなかった。

一口に言うと，漢字は草書の字体にまで発展してきたことは行きつく所まできてしまったことと同じ，更に大きな変化を求めることはできないであろう[45]。

三. 漢字簡略化の歴史的基礎

以上漢字の起源とその変遷を考察してきたが，そこでわれわれは二つの事実を発見することができよう。一つは，簡略化は漢字の発展方向であること。もう一つは，簡体字は中国史上の各朝号にわたって流行していること。

(一) 簡略化は漢字構造の発展方向である一：

三千余年前から漢字は絶えまなく変化してきたが，ある時はその変化が早くなったり，ある時は遅くなったりする[46]。文字制度上において，それは主として形声化のレベルを高める方向に向けて発展し，文字符号上において，それは主として簡略化の方向に向けて発展してきたのである。

文字制度上から見ると，漢字は甲骨文の時期から早々と形声化制度に入っていた。ところが終始形声化制度の域を乗り越えて表音化制度に入ることができなかった。ただ単に形声化制度の範囲内で絶えまなくその形声化の程度を高めたり，絶え間なくその形声化符号の組合せ（形声字）を増やしたりすることに過ぎない。甲骨文の中では形声字の比重は20％しかなかったが，近代漢字の中ではその比重は90％以上も上昇した[47]。

文字符号は構造（字式）と形態（字体）の二つの方面を有している。漢字の構造的な変化は主に規範化の下において簡略化を進めて行く。早期の統一図形を経て，大きさを整え，序例を劃一した後，筆画の形と数について一般的に言えば，変化すればするほど形は簡単になり，数は少なくなるのである。漢字の形態的な変化は主に線状化と均整化へ，同時に円形化と四角形化を経て変化して行く。甲骨文，金文から大篆，小篆までの間では曲線的な円形化字体の方へ発展したが，隷書，楷書から木刻版の宋体，明体と鉛字印刷体までの間では直線的な四角形化字体の方へ発展した。四角形化字体は漢字最後の形態，つまり定められた形であるから，「方块字」（四角形字）の綽名を得た。外形が固定した条件の下に，漢字の符号上の変化の重要な現われは，構造的な簡略化である[48]。

漢字の基本的符号は単独の「文」であり，つまり単一の符号である。単一の符号の構造的な変化は筆画を減少する簡略化の方向へ前進するものである。合体の字は二つ或いはもっと多い「文」の組合せである。「字」の筆画は幾つもの「文」の筆画が加わったものであるから，勿論単独の「文」の筆画よりも多い。「文」から「字」の筆画の増加のことは単一の符号自身の筆画の増加のこととは本質的に異なるものである。前者は主として形声化の結果であり，文字制度上の発展であるが，後者は単純な符号構造上のいわゆる「繁化」（繁雑化）である[49]。

「文」と「字」は両方とも音節の符号を代表するもので，紙面では一個の「字」と一個の「文」は同じ大きさのわくを占めているため，普通は「文」を「字」とも呼んでいる。したがって単一の符号の筆画の増加と符号の組合せによる筆画の増加，この本質的に違う二つのものを人々は区別せずに同じ繁雑化と見なし，しかも繁雑化を簡略化と対等，または対立させ，漢字の変遷を二つの矛盾な趨勢であると見なしてきたのである。しかし，われわれは先ず文字制度と文字符号の区別をはっきりしておかなければならない。表音制度に入る前に文字制度の前進運動は形声化であると指摘したい。形声化は文字を単独の「文」を増やさないままで，合体の「字」を増加させ，単一符号図形の絶えまない発生を制限することができるし，同時に又書き方（形式）において同音字を分化する作用を持つ。これは形声化が原始の表意制度よりも優れた主要な点である。

文字符号の前進運動はいかなる時期においても一定条件の下での簡略化であって，繁雑化ではない。符号の組合せは符号の簡略化に対して促進作用を持つが，しかし，これを「繁雑化は簡略化の始まりである」又は「繁雑化は簡略化のためである」という理由にしてはならない。

例えば，「佳」と「鳥」はもともと両方とも象形文字（単独の文）であるが，その後表音符号の「奚」を付け加えて，「雞」と「鷄」になったわけである。この変化をわれわれは，その本質，つまり，文字制度上の変遷として認識し，それを形声化と呼ぶべきであって，その表面的な現象だけを見て，それを筆画の繁雑化と見なしてはならない。𠂆から𠂆（佳）に変化したのは，「文」の筆画の簡略化

であるが[50]，「鷄」から「鸡」，つまり「又」を以って「奚」を代替したのは，「字」の筆画の簡略化である。「文」と「字」両者とも複雑から簡略へと変遷する趨勢を有することはおのずと明白であろう[51]。

（二） 簡体字は中国史上の各朝号にわたって流行している—：

甲骨文の時期から現代まで漢字の中で絶え間なく異体字が生れていた[52]。異体字は必ずしも簡体字ではないが，筆画の簡略化は異体字が発生した一つの要因である。簡略化した異体字は，一方書く早さの要求の下で生れた「草体」（草書体）からきたものでもあるが，一方筆画の省略の要求の下に生れた「俗体」（通俗体）からきたものでもある。

漢字の「正体」（楷書）と「草体」（草書体）の分裂はほぼ秦時代に始まったものである。正体は荘厳の場合で使用されている。例えば，重要文献，彫刻された石碑文，木刻書版等。草書体は比較的にいい加減に使用されていた。例えば，重要でない文献，書物の書き写し，通信，記帳等。草書体は普通正体から分裂したもので，それは正体と分離して同時に使用されているものであって，互いに排斥するものではない。正体と草書体の分裂は基本的には形態の変化である。しかし形態の変化から発展して構造の簡略化になることもしばしばある。筆画簡略化の面から見ると，草書体はいつでも正体の先を行くのである。

漢字の「俗体」（通俗体）は必ずしも簡略体ではないが，ほとんど簡略体であると言ってもよい。筆画の簡略化した俗体字の生命力は一番強い。歴代の俗体字は残されている石碑文，木刻書版，木の札，竹の札，経文，文書，手紙……等に見られる。その重要な資料は漢の石碑に刻まれた俗体字，六朝の石碑俗体字，唐の石碑と唐人が経を書く俗体字，宋元明清木刻印刷の俗体字等が挙げられよう[53]。これらの資料はあることを意味している。つまり俗体字の発生は歴史の中ではとまったことがない。俗体字はただ単に比較的にいい加減の場合に使用されるものだけでなくて，荘厳の場合にも使用されていた。一般の人々が書く場合に用いられるだけではなくて，厳格な文字訓練を受けた学者の間でも用いられていた。よ

く考察すると，各種類の字体の中には皆俗体字がある。それは形態の制限を受けない構造の簡略化である。

以上一口に言えば，漢字にある同字異体の現象（俗体字も含めて）は，古くから，つまり，殷周古文の時代からあった。それらの異体字又は俗体字はただ単に複雑と簡単との差に過ぎない。簡単なものは複雑なものに対して言えば，すべて簡体字と呼んでも差しつかえない。そうすると，簡体字はもう漢字ができた時代から存在していたものであるに違いないと考えることができよう[54]。

四．漢字の簡略化運動

漢字の簡略化運動は三つの角度から論じなければならない。(一)漢字字数の制限の問題，つまり基本字（常用字）の選定とのかかわりのある問題である。(二)混乱し易い字の整理の問題，つまり形声系統の整理とのかかわりのある問題である。(三)筆画数の減少の問題，つまり簡体字との関係ある問題である。先ず字数の制限の問題から論じよう。

(一)　字数制限一：

中国の漢字の字数は一体どれくらいあるのか。この字数を正確に掌握するのはそれほど容易ではない。なぜならば，社会の発展につれて漢字は常に増加しつつあり，数千年の間，累積してきた結果その字数が増えてきたからである。1716年に発行された「康熙字典」は権威のある古い字典であり，その収録数は四万七千零三十五字である。一部の古代異体字を加えると合計四万九千三十字もある。1915年に出版した「中華大字典」は四万八千余字を収録している。この二冊は今まで中国で収録した字数の一番多い字典である。現在の情況では漢字の数は大体六万字（その中異体は約二万）あるようで，これら六万字の中で，大多数は現在使われない古字と古異体字である[55]。1971年に修正した「新華字典」は約八千五百を収録しており，その中に一部の異体字が含まれている。「新華字典」はある程度現代中国の通用漢字の情況を反映しているので，一般の通用漢字は約七八

千あると推定される。常用漢字は一体どれくらいあるのか。これは次ぎの統計を参考にすればわかるだろう。「毛沢東選集」四巻で使用される違う漢字は約三千字，小学校を卒業するまで約三千字を覚えることが要求されている。印刷工場で常用字盤の字は普通三千字を越えない。上述の三種類の情況を見て，又一部の各専門の常用字を加えれば，常用字は約三千五百前後あると言ってもよい[56]。

今も昔も同じ一般の人にとって，こんな膨大な字数を覚えるのは大変なことである。特に初心者には至難のわざである。日常生活の中で必要とする最低限の字数の制限，基本字又は常用字の選定等に対する要求は昔からあった[57]。三国時代魏国の鍾繇（151～230）と南北朝の時代梁国の周興嗣（？～521）両氏とも，「千字文」を編さんしたことがある。字数を千字前後に納めてあった。これは古代の常用字の教科書である。1908年（光緒34年）清の学部（当時の文部省）は簡易識字教科書を編さんするよう奏上した[58]。この教科書は三種類に分けてある（3,200字，2,400字，1,600字）。日常一般の字と通用している文を採用した。1922年平民教育促進会が「平民千字課」を出版した。1923年陶知行氏等が再び編さんして1,286字を用いた。1925年改めて編さんして「市民千字課」（1,302字使用）と「農民千字課」（1,138字使用）の二種類に分けた。それから千字課の種類が次第に多くなった。

1928年陳鶴琴氏が「語体文応用字滙」を出版した。この字典は彼が長年をかけ統計方法を用いて「白話文」（口語体）の中に漢字の出現頻度を研究したものである。中で4,261字を選定した。1929年敖弘徳氏が陳氏の研究を受け継ぎ「語体文応用字滙報告」を発表した[59]。1930年王文新氏が「小学分級字滙研究」を発表し，小学生の知るべき字数3,799字を選定した（四年生まで2,546字，五，六年生1,253字追加）。1935年洪深氏が「1,100個基本漢字教学使用法」を発表し，基本字の設計を提出した。基本字の選定は漢字出現頻度に基かないで，その代表できる意義に基いたものである。1948年呉廉銘氏が「中華基本教育小字典」を編さんした。字典の中にある注解は1,100の基本漢字と500の補充字を制限して，計1,600字であるが，字典自身が収録したのは5,200字であって，基本漢字の数を遥かに越

えた[60]。

1949年中華人民共和国成立後，中央教育部が新しい要求に基き，新たに常用字問題を研究した。最初は三種類の「字滙」[61]と五種類の教科書[62]に基いて1,589字を選定したが，その後七種類の資料[63]を追加して，1,566字に改めて選定した。1951年一等常用字1,010，二等常用字490，合せて1,500字を取り決めた。その外に補充常用字500を別に選定して，合計2,000字になり，1952年教育部によって公布された。これはいわゆる現在の文盲退治の識字基準（普通は農民1,500字，労働者2,000字を基準とする）である。1956年中国文字改革委員会が「通用漢字表草案初稿」を印刷発布し，各方面の意見を求めたことがある。この表では全部で通用漢字5,448字（その後500字を追加）を収録し，常用字1,500，次常用字2,015，不常用1,933に分けた。不常用字は「文言」（古文）の要素，姓名，歴史，地理，動植物，科学技術とその他（宗教，民族，方言，音訳）等六種類を含めている。常用字と次常用字をたせば3,515になり，小学校と中学の教科書，通俗読物，青少年雑誌，小型字典の基本語彙等の編さんに用いる。不常用字は比較的にハイレベルの書物の応用に供える。

以上のように基本語彙や常用字の選定は漢字教学にとっては非常に有益である。たとえその目的は漢字の総数を制限又は減少することではないとしても，漢字の総数を制限又は減少する問題に対しては極めて密接な関係を持っている[64]。

（二） 混乱し易い字の整理一：

漢字の中では同じ発音，同じ意味であるが書き方が異なる，いわゆる同音同義異形字が多い。例えば，「綫」と「線」，「雞」と「鷄」等がそれである。又字の形は同じだが，発音と意味が全然違ういわゆる同形異音異義字が多い。例えば「書，晝，畫」，「戊，戍，戌」，「己，已，巳」等がそれである。又同じ発音で，形と意味が全然違うすなわち同音異形異義字も少なくない。例えば「麗（ℓi），利（ℓi），勵（ℓi）」，「億（yi），義（yi），藝（yi）」等がそれである[65]。

上述のような例は診しくない，常に見られるものであるが，しかしそれは文字

の中では厄介なもので，学習上や使用上においては，混乱を来し，無駄な時間や人力，物力を費やすことになるのである。特に同音同義異形字即ち異体字の問題が漢字の大きな悩みの種になり，古くから異体字を整理する要求が強かった[66]。

異体字（俗体字を含めて）の混乱現象を整理するために，歴史上から見れば，何百年おきに必ず一回の割合で漢字の「正字工作」（正字法）をやるのである[67]。各時代とも同じ，常に法令を用いて「正字工作」をおしすすめる。秦始皇帝が文字を統一したのは一番重要な「正字工作」である。西漢初年，東漢初年，唐代等皆法令を以って正字法をおしすすめていた歴史の記録が残っている。北魏が始まった頃（504～507），唐の初期（836～840）……等，「石経」を刻み立たせて、正字法の手本として大衆に示した。

しかしながら，政府の法令の影響はいつも民間のその「正字工作」に及ばない。民間の正字工作とは個人の著作を用いて文字の「正体」と「俗体」（又は異体）とを評論する方法である。最初この方法で出版された著書は，東漢の許慎氏（約55～149）の手によるものである。彼が「説文解字」という本を書いた主要な目的は，当時一般の学者や知識人に字形の間違いを解釈するためである。唐の初期顔元孫氏が「千祿字書」の中で異体字を「俗，通，正」三種類に区分して，一般の人々に正しい字の使い方を唱えた。その後張参氏の「五経文字」，唐元度氏の「九経字様」等も皆混乱している漢字を整理するためにできた著書である[68]。

漢字の整理はこのように政府の保守的な力と庶民の前進的な力との矛盾の中にゆっくりと簡略化へ向けて前進してきたのである。又現在，漢字を使っている限り，この混乱し易い漢字をどうやって整理して行くかという問題についても，上述した歴史の事実は，われわれに良い鏡となるであろう。

(三)　筆画数の減少一：

漢字の重要な困難は覚えにくいことであるが，同時に字の筆画数が多過ぎるため，書くことも難しいのである。漢字の筆画数が多過ぎることは次ぎの〝筆画数と字数の対照表〟からわかる（一冊の現代辞典を利用して統計したもの，統計し

た総字数は7261個)。

筆画数：	1	2	3	4	5	6	7	8	9
字　数：	5	27	53	106	143	197	449	497	524
筆画数：	10	11	12	13	14	15	16	17	18
字　数：	627	665	704	675	525	597	481	371	292
筆画数：	19	20	21	22	23	24	25	26	27
字　数：	268	197	150	111	85	55	36	17	20
筆画数：	28	29	30	31	32	33			
字　数：	4	4	3	1	1	1			

（注）「中国文字拼音化問題」p.34から引用したもの。

上の表から見ると，字の筆画数が一番多いのは33画である，12画の字が一番多い，704個もある。大多数の字の筆画数は7画と19画の間にあり，その字数は6675個で，総字数の92%を占め，一字あたり12.5画である。もし一秒間四画で計算すれば，一時間ごとに1200字が書ける。もし一秒間二画で計算すると，一時間ごとに600字しか書けないわけである[69]。このように漢字を書く速度は非常に緩慢であるため，昔から簡体字の運動が多くの人によって提唱されてきた[70]。

明朝の末期，清朝の初期の学者黄宗羲氏（1610～1695）は俗体字で本を書いたりして，時間の節約を説いた。清の文学者江永（1681～1762），孔広森（1752～1786）氏らは皆簡体字で書くことを好んでいた。1909年（宣統元年）「教育雑誌」が創刊された。この創刊号の中に一本の重要な論文は簡体字を提唱する論文であった。作者は陸費逵氏であり，テーマは「普通教育応当採用俗体字」（普通教育は俗体字を採用すべきである)。1921年陸費逵氏は再び「整理漢字的意見」を発表し，二つの具体的な方法を発表した：①俗体字の範囲を限定して，ほぼ二千個の漢字にする。②漢字の筆画を減少して，先ず，すでに社会的基礎のある簡体字を採用し，次ぎはその他の筆画数の多い字の形を変えて筆画数を減らす。陸費逵氏のこれらの主張は今見ても進歩的な意義を持っているものである[71]。

1922年錢玄同氏が国語統一等備委員会で「減省現行漢字的筆画案」（現行漢字の筆画を減らす案）を提唱し，陸基，黎錦熙，楊樹達諸氏によって署名された。錢玄同氏は次ぎのように言った「文字はもともと一種の道具であり，道具はその適用性で以ってその優劣の判断基準とすべきである。筆画数の多い字は書きづらいし，時間も費やすので，勿論適用性が低く，筆画数の少ないものは書き易いし，時間も節約できるので，勿論適用性が高い[72]。」彼はすでに通用している簡体字を採用すると同時に新しい簡体字を作るべきであると主張した。この呼びかけで簡体字運動が一層活発になってきた。

1928年胡懐琛氏は彼の「簡易学説」の中に「簡易字彙」を発表した。これは意識的に簡略化に尽すためにできた資料整理であった。1930年刘復，李家瑞両氏が「宗元以来俗字譜」を出版した。これはわれわれに一番大きな影響を与えた簡略化漢字の資料専門書である。同年卓定謀氏が106種類の章草資料を収集した後「章草考」を出版した。同年陳光垚氏の「簡字論」が出版された。1931年徐則敏氏の「常用簡字研究」も出版された。1932年に出版された「国音常用字彙」の中に数多くの簡体字を収録した。これは一番早く世間に顔を出した簡体字字書である。1933年陳光垚氏の「簡字論集続集」が出版された。1934年杜定友氏が「簡字標準字表」を発表した。同年徐則敏も「550俗字表」を発表した[73]。錢玄同氏も又国語統一籌備委員会において「搜採固有而較有適用的簡体字案」を発表した。1935年委員会が「簡体字譜」の草稿を編成し，2,400余字を収録した。簡体字運動はここまでくるともうクライマクスに達した。

1935年簡体字運動は初めて実際行動に移行した。同年の春，上海の文字改革運動者は「手頭字（手書き字又は略字）推行会」を組織し，第一組の「手頭字」300字を選定した。二月には，文化界200人と「太白」，「世界知識」，「訳文」等15雑誌社によって「推行手頭字縁起」を共同で発表した[74]。簡体字運動の洪水に押し流されて，ついに政府の教育部も「第一批簡体字表」（324字）を公布せざるを得なかった。この簡体字表は次ぎの三点を原則として作ったものである。①今まであったものを伝えるだけで，新しいものを作らない。②社会で比較的通用す

る簡体字を選定して最優先に採用する。③もとの字の筆画がはなはだ簡単なものであれば，簡略化を求めない。しかし「第一批簡体字表」が1935年 8月に公布した後，1936年 2 月になるとつづいて「不必推行」（普及する必要がない）という命令が出された。

1936年10月容庚氏の「簡体字典」（4,445字）が出版された。彼は燕京大学にて簡体字授業を開設して，その実験を行った。同年11月陳光垚氏の「常用漢字表」（3,150字）[75]が出版された。その中にある簡体字は，草書体からきたものが 48％を占め，俗体字からきたものは40％を占めるが，その中には著者により書き直されたものも多く見られる。1937 年 5 月字体研究会が「簡体字第一表」（約1,700字）を発表した。これは151種類の書籍を参考にし，各字ともその出所を注記してある。

中華人民共和国成立後，簡体字運動は民衆により推進されている中で，政府も歩調をそろえて組織的に整理と設計をし，その結果1956年の「漢字簡略化方案」が生れ，長い間民衆が求めてきた漢字簡略化の願望はやっと初歩的に実現されたわけである。

五．漢字簡略化方案の公布

（一） 漢字簡略化方案草案の発表

新中国の生まれた翌年（1950）6 月中央人民政府の教育部では常用字の研究と漢字簡略化の仕事を始めた。1952 年 2 月に「中国文字改革研究委員会」が設立され，「漢字の整理と簡略化」という仕事に取組んだ。1954年12月「中国文字改革研究委員会」は実践に移すため，「中国文字改革委員会」に名称を変え，1955年 1 月に「漢字簡略化方案草案」を発表し，全国人民の討論にゆだねた。

＜漢字簡略化方案草案の説明＞

この方案は，三つの方法によって漢字を簡略化するようになっている。(一)筆

画の簡略化，(二)字数の簡略化，(三)書きかたの簡略化。

(一)　筆画の簡略化—：

これは簡体字で以って繁体字に取って代わることである。簡体字とは，筆画の簡単な字，たとえば「声」は「聲」の簡体字，「灶」は「竈」の簡体字。こういった文字は，ずいぶん昔からあった。近年，少数ではあるが，簡体字はもうすでに新聞や書物に現われ，又手書きや謄写印刷物からも，沢山の新しい簡体字が見られた，中国文字改革委員会は，これら通用している簡体字の中から一部を選定して，繁体字の代りにしようというのである。つまり簡体字の合法化をはかるのである。その他，古代のほうが筆画の少なかったものは，それを使う。たとえば「鬚」「鬚」「塵」の代りに「胡」「須」「尘」を，また筆画が多くて簡体字のないものは同音の字を代用する。たとえば「礬」「叢」「醜」の代りに「凡」「丛」「丑」を。又筆画簡単な「声旁」(形声の偏旁）を以って複雑なものの代りに置き換える。たとえば，「了」を以って「尞」に代替し，「遼」「僚」「療」等は「辽」「仂」「疗」のように簡略化することができる。以上の方法で「798個漢字簡化表草案」を作った[76]。

(二)　字数の簡略化—：

これは異体字を統一することからやるのである，漢字の中には一字多体の字が多い，これは異体字とも呼ぶ。たとえば「群羣」「峰峯」「仙僊」等。大量の異体字の存在は，語文教学上に困難をもたらすのみでなく，編さん，校正，植字等の仕事にも手数がかかるのである。中国文字改革委員会はかかる異体字の整理をおこない，まず400字あまりの異体字を整理して，「擬廃除（廃除したい）400個異体字表草案」を作った。この400の異体字は，こんご，一般の印刷物には使用しない[77]。

以上筆画の簡略化と字数の簡略化（異体字の整理）をした後，合計1198の漢字を廃除した。

(三)　書きかたの簡略化—：

筆写体が行書や草書をとり入れると有益であるから，中国文字改革委員会は

「漢字偏旁手写簡化表草案」[78]を作って，漢字の偏旁（その他の構成部分も含めて）を簡略した書き方を列挙し，筆写と教学上の参考とする。

この方案にたいし，全国の文学者，言語文字の教師，部隊や組合で文化の仕事をしている人が，盛んに意見を出し合った。1月から10月までに，この討論に参加し，意見を述べた人が20万人もあった。

（二） 漢字簡略化方案の正式公布

それらの意見をとりいれて大幅に修正された。10月に全国文字改革会議が北京でひらかれ，この修正案が可決され，翌1956年1月，国務院から「漢字簡略化方案」として公布されたのである。

＜漢字簡略化方案の説明＞

「漢字簡略化方案」は三部にわかれている。

1. 第一部すなわち「漢字簡化第一表」—：この表の中に載せた簡体字は計230字，もうすでに大部分の新聞雑誌で試用されたものである[79]。1956年2月1日より全国の印刷物及び筆写の文書に一律通用することになる。古文書を翻訳する場合とその他の特殊な理由がある場合を除けば，印刷物上では原来の繁体字を使用すべきではない。

2. 第二部すなわち「漢字簡化第二表」—：この表の中に載せた簡体字は計285字。これは将来修正するかもしれないから，補充としておく[80]。

3. 第三部すなわち「漢字偏旁簡化表」—：この表の中に挙げられた簡略化偏旁は54個。

（三） 漢字簡略化方案の分析

よく知られているように，漢字字体の変遷は多様性であるため，これら簡体字の生れ方も多様性を有しているが，しかし総合して見れば次ぎの七種類を出ないようである。

1. 同音代替字—：現代漢語の中に意義の混乱を起さない条件の下で，筆画の少ない同音字で以って筆画の多い字を代替することを「同音代替」という。たとえば，「面」で「麵」を，「沈」で「瀋」を，「余」で「餘」を代替する。このように字形が簡略化され，又字数も減少されるのである。

2. 形声字—：形声の方法で漢字を簡略化するには，次ぎの三つの情況が考えられる。

(1) 形偏，声偏とも筆画が繁雑しすぎるものを筆画が少ないものに変える。たとえば，「驚」を「惊」に，「潔」を「洁」に変える。

(2) 声偏の表音が正しくないものを正しいものに変える。例えば「遷」を「迁」に，「嚇」を「吓」に変える。

(3) 形声字ではないが，しかも筆画が繁雑なものを筆画の少ない新しい形声字に変える。たとえば，「戰」を「战」に，「進」を「进」に変える[81]。

3. 特徴字—：その字の特徴部分を以ってその字を代替する。このように筆画も減少できるし，見わけもし易い。たとえば，「声」(聲)，「医」(醫)。

4. 輪廓字—：元来の字の輪廓をそのまま残して，その中の部分の筆画を省略する。たとえば，「汇」(滙)，「伞」(傘)，「齐」(齋)。

5. 会意字（意味で簡略した字）—：幾つかの常用字（或いは偏旁）を用いて一字を構成し，一つの意味を表わす。たとえば「灭」(滅)，泪（涙)，「尘」(塵)。

6. 符号字—：その字の繁雑で難しい部分を簡単な筆画や字で代替させる。これらの筆画や字はこのような簡体字の中に，ただ符号として見なされ，表音又は表意の機能をもたない。たとえば，「欢」(歡)，「赵」(趙)，「归」(歸)。

7. 草書楷化字[82]—：草書体を楷書の形式に変え，もっと多くの筆画を減少することができる。たとえば，「书」(書)，「为」(爲)，「专」(專)[83]。

方案の515の簡体字は，簡略化する以前は一字平均16.08画であったが，簡略化以後は一字平均8.16画になった。この515字だけ見ると半分くらいの筆画を省略したわけである。

515の簡体字全部を普及した後の効果は次の幾つかの初歩的な統計からもわか

るであろう。

1. 文書一篇だけの統計一：全文は455個の異なる漢字を持っている。その中出現した簡体字は162個，35%を占めている。全文総字数は2,258個，その中簡体字総数700個，31%を占めている。全文繁体字で書くと計19,950画，簡体字で書くと計15,434画，4,516画が減少され，すなわち筆画総数の22.6%を減少したわけである。

2. 新聞社説百篇の統計一：百篇の社説の総字数は255,124字，繁体字を用いると一字の平均筆画は9.15画であったが，簡略化以後は一字の平均筆画は7.67画になり，1.48画も減少した。すなわち16.1%を減少したわけである。

3. 常用字表の統計一：二千字の常用字について，簡略化する以前は全部で22,375画，一字平均11.2画であった。簡略化以後は全部で19.560画，一字平均9.8画，1.4画の減少，すなわち12.5%を減少した。簡略化以後，二千字の常用字の中に，11画以上の漢字はまた786字ある。もしこの786字の漢字を更に10画まで簡略すると，二千字の常用字の筆画総数は17.349画に減少し，一字平均筆画は8.7画までに減少するだろう。これは簡略化する以前よりも一字平均筆画数を2.5画も減少する。すなわち22.3%を減少するわけである。

以上これらの筆画の統計には簡略化した偏傍の計算を入れていない。もし一緒に計算すれば，筆画減少のパーセンテージはもっと高くなるだろう。

しかし筆画の簡略化の効果は主として全文の筆画総数によって決められるのであるから，先ず出現頻度の高い漢字から簡略化しなければならない。そうしないとそれほど効果が上がらないだろう[84]。

人間が一生の間に，字を覚える時と字を書く時に占める時間は割に少ない。学習段階をすぎたら，すぐ書くと閲読する段階に入る。著作，記者……等を職業とする者を除けば，書くことは一生の間にそれほど時間を占めていない。文字と接触する時間は，いかなる人でも「閲読」に費やした時間が一番長い。閲読の面から言えば，筆画の減少した簡体字は視覚上の明晰度を増進するから，閲読の速度を高める効果がある。しかし，もしあまりにも簡略しすぎて，筆画の異なる部分

をなくし，形体の似通った部分が増えたら，それは区別することが難しくなり，視力が疲労するため，閲読の効率が低下して行くだろう[85]。一言で言うと筆画の簡略化は初心者や書くことを仕事とする者にとっては効果があるが，「閲読」にとってはそれほど効果がないわけである[86]。

前にも述べたように，簡体字は常に歴史の先端を行くものである。とは言え，一種の新しい字の普及は，「約定成俗」（習わしが次第に定まって，広く一般に認められたものとなる）にそむいてはならない。習慣を改めることは長い時間を要し，難しい仕事である[87]。

歴史を見ればわかるように，三国時代の孫休，南北朝の魏世祖，唐の武則天諸氏はすべて新しい字を作って強制的に人々に使わせた人である。ところが彼らが作った字は，結果的には通用されなかった。よく知られているように1978年に出された「第二次漢字簡化方案草案」の中にある「阝」（部），「⺈」（虐），「厶」（私），「ヨ」（雪）……等の字[88]も簡略しすぎて，美的感覚[89]を失ったせいか，未だに一般の人の間に使用されていない。言い換えれば新しく造った字が簡略しすぎたり多すぎたりすると，かえって文字改革の実施に支障をきたすのである[90]。

六. 結　論

以上漢字簡略化の問題を漢字の起源から漢字簡略化方案の公布まで歴史の観点から論じてきたが，そこでわれわれは漢字の歴史は漢字簡略化の歴史でもあるという認識を得ることができた。これは文字符号上の変化と文字制度上の変化の両面から理解できよう。

三千余年前から漢字は絶えまなく変化してきたが，文字符号上において，それは主として簡略化の方向へ向けて発展し，文字制度上において，それは主として形声化のレベルを高める方向に向けて発展してきた。

文字符号上から見ると，その前進運動は，いかなる時期においても一定条件の下での簡略化であって，繁雑化ではない。文字符号は構造（字式）と形態（字体）の二つの方面を持っている。漢字の構造的な変化は主に規範化の下において簡略

化を進めて行く。早期の統一図形を経て，大きさを整え，序列を劃一した後，変化すればするほど筆画の形は簡単になり，筆画の数は少なくなるのである。漢字の形態的な変化は主に線状化と均整化へ，同時に円形化と四角形化を経て変化して行く。形態が固定（四角形化）した条件の下に，漢字の符号上の変化の主要な現われは，構造的な簡略化である。第一次の漢字簡略化方案又は第二次漢字簡略化方案草案[91]の中に挙げられた漢字は正に構造的な簡略化である。

文字制度上から見ると表音制度に入る前にその前進運動は形声化である。漢字は甲骨文の時期からはやばやと形声化制度に入っていた。ところが，漢字は終始形声化制度の域を乗り越えて表音化制度に入ることができなかった。ただ単に形声化制度の範囲内で絶え間なくその形声化の程度を高めたり，形声化符号の組合せ（形声字）を増やしたりすることに過ぎない。第一次漢字の簡略化方案又は第二次漢字簡略化方案草案を見ても，漢字はまだ形声制度の範囲内にとどまり，つまり未だに形声制度から表音制度に移っていない。

しかし1956年「漢字簡略化方案」が正式に公布されたと同じ年に「漢字拼音（表音）方案草案」（漢字をローマ字化する発想）[92]も出され，国務院で決議された。前者は簡略化運動，後者は表音化運動，相矛盾するこの二つの運動が時期を同じくして推進されることは一体どういう理由によるものであろうか。これは，ローマ字擁護論者の次ぎの主張から，両者の関係がはっきりわかるであろう。

漢字の改革は二つの方面から進めて行かなければならない。一方では表音の新文字を作り，一方では漢字を簡略化する。後者は表音文字が完全に行われるまでの過渡的なものである，これは表音文字と合わせて実施しなければならない。換言すれば表音化制度が，最後の目標であり，漢字簡略化は，最終目的にいたる方法の一つである。終局的には漢字を廃止して，表音文字（ローマ字のようなもの）で以ってそれを代替することになる[93]。

勿論これらの文字改革論者の言う通り，漢字の一番大きな欠点は「表音文字ではない」[94]というところにあるため，言葉を表す符号が早くから言葉より離脱した。しかし漢字の一番大きな優点もそこにある。これは一種の弁証法的な見方か

も知れないが，漢字が言葉から離脱したからこそ，その形体は言葉の音声とともに変化しなかった。したがって時間の面において，かなりの永久性を保つことができた（通用している漢字楷書は唐朝より定められ，現在にいたるまで千余年を経ても大きな変化が見られない）。空間の面において，更に驚くほど統一性を持つようになった（漢字を知っている人なら，いかなる異なる方言地区でも筆談で互いに意思疎通をはかることができる）。以上にかんがみて，漢字を簡略化 ⟶ 漢字を廃止 ⟶表音文字（ローマ字）化へという図式が一体実現する可能性があるのだろうか。

注

（1） 李中昊編，「文字歴史観与革命」p. 49.
（2） 古代まだ文字のなかった時代に，縄に結び目をつくって記録する。
（3） 黄約斉著，「漢字字体変遷史」p. 2.
（4） 蔣周著，「漢字浅説」p. 8.
（5） 白河次郎，国府種得著，「支那文明史」p. 43～54.
（6） 蔣周著，前掲書 p. 8.
（7） 蔣周著，前掲書 p. 9.
（8） 蔣周著，前掲書 p. 10.
（9） 蔣周著，前掲書 p. 3.
（10） 蔣周著，前掲書 p. 4.
（11） 黄約斉著，前掲書 p. 2.
（12） 黄約斉書，前掲書 p. 3.
（13） 古代，亀や獣骨にきざまれた占いの言葉，丁易著，「中国文字与中国社会」p. 21.
（14） 傅東華著，「漢字」p. 30～36.
（15） 黄約斉著，前掲書 p. 3.
（16） 傅東華著，前掲書 p. 36～38，40.
（17） 黄約斉著，前掲書 p. 4.
（18） 両周金文辞大系考釈を参照。
（19） 黄約斉著，前掲書 p. 4.
（20） 傅東華著，前掲書 p. 41.
（21） 黄約斉著，前掲書 p. 9.
（22） 傅東華著，前掲書 p. 39～41.
（23） 丁易著，前掲書 p. 61.

(24) 黄約斉著，前掲書 p. 11.
(25) 黄約斉著，前掲書 p. 12.
(26) 殷周銅器に刻まれた文字の中では，常に同一銅器の胴体と蓋に同字異体字が発見され，石鼓文の中では，このような現象は見あたらない。
(27) 黄約斉著，前掲書 p. 13.
(28) 傅東華著，前掲書 p. 41，42.
(29) 黄約斉著，前掲書 p. 16.
(30) 傅東華著，前掲書 p. 42～44.
(31) 黄約斉著，前掲書 p. 18.
(32) 黄約斉著，前掲書 p. 19.
(33) 昔，上流階級，読書人階級，知識分子……等の総称。
(34) 黄約斉著，前掲書 p. 20.
(35) 黄約斉著，前掲書 p. 21.
(36) 伊東参州著，「日中書道散歩」p. 1～43.
(37) 黄約斉著，前掲書 p. 21.
(38) 傅東華著，前掲書 p. 46.
(39) 黄約斉著，前掲書 p. 25.
(40) 皇帝や上司の命令を刻んだ札。
(41) 黄約斉著，前掲書 p. 26.
(42) 黄約斉著，前掲書 p. 27.
(43) 黄約斉著，前掲書 p. 29.
(44) 愛知大学中日大辞典編纂処編，「中日大辞典」p. 315 参照。
(45) 黄約斉著，前掲書 p. 31，32.
(46) 佐伯梅友著，「国語概説」p. 44.
(47) 周有光著，「漢字改革概論」p. 315.
(48) 周有光著，前掲書 p. 315，316.
(49) 周有光著，前掲書 p. 316.
(50) 加藤常賢著，「漢字の起源」p. 869.
(51) 周有光著，前掲書 p. 317.
(52) 李中昊著，前掲書 p. 159.
(53) 周有光著，前掲書 p. 318，319.
(54) 黄約斉著，前掲書 p. 39.
(55) 語文彙編第十四輯，張周編「簡化漢字的好処」p. 4.
(56) 易熙吾氏の統計によると：

1. 天津タイプ学校の「華文打字機字類排列表」 2,252 字

2. 陳人哲氏の「民衆実用字彙的研究」 2,304 字
3. 陳虞裳氏の「民衆常用字彙」 2,472 字
4. 平民教育促進会の「通用字表」 3,420 字
5. 杜佐周の「児童成人常用字彙的調査」 4,117 字
6. 陳鶴琴の「語体文応用字彙」 4,261 字
7. 敖徳弘の「語体文字彙研究報告」 4,339 字
8. 荘沢宣の「基本字彙」(常用 2,827 ＋予備用と滅多に使用しない字) 5,262 字
9. 商務印書館の「華文打字機字位表」(常用字盤 2,401 ＋予備用) 5,372 字
10. 黎錦熙の「注音漢字」(最常用 3,516 字，次常用 1,095 字＋予備字) 5,787 字

以上十種類の常用字典は平均 3.958 字である。

李智氏が研究した表から見れば：

最常用字	1,000 個	普通読物の	89 %
〃	1,500 〃	〃	94 %
〃	2,000 〃	〃	97 %
〃	2,500 〃	〃	98 %
〃	3,000 〃	〃	99 %
〃	4,000 〃	〃	99.8 %

これらの資料にもとづいて，常用字 4,000 字を覚えておけば普通の新聞，雑誌，書籍が読めるし，文章や手紙も書けることがわかる。

(57) 呉玉章著，「文字改革文集」p.91.

(58) 文字改革出版社編，「清末文字改革文集」p.79～82.

(59) 教育雑誌21巻 2 ～ 3 期。

(60) 周有光著，前掲書 p.329.

(61) 三種類の「字滙」：

① 辛安亭氏の「群衆急需字」

② 黄貴祥氏の「文盲字滙」

③ 呉廉銘氏の「中華基本教育小字典」の中にある 1,600 新しい字表。

(62) 五種類の教科書：

① 旅　大
② 済　南
③ 華　北
④ 晋察冀
⑤ 山　東

} 等五種類の工農文化教科書

(63) 七種類の資料：

① 李智氏六種類字滙総合統計

② 陝甘寧辺区群衆常用字
③ 天津五百労働者識字調査統計
④ 華文（中国文）タイプライター常用字
⑤ 工人日報常用字盤
⑥ 新華印刷工場常用字盤
⑦ 華東渤海新華書店印刷工場常用字盤

(64) 中国語文雑誌社編,「中国文字拼音化問題」p. 29. 周有光著，前掲書 p. 329.
(65) 人民出版社編,「中国文字改革的第一歩」p. 33，34.
(66) 王立達編,「漢語研究小史」p. 152.
(67) 黄約斉著，前掲書 p. 34，35.
(68) 黄約斉著，前掲書 p. 35，38.
(69) 中国語文雑誌編，前掲書 p. 33.
(70) 黎錦熙著,「文字改革論叢」p. 18.
(71) 陸費逵著,「教育文存」巻三参照。
(72) 1923 年国語月間「漢字改革号」
(73) 1927 ～ 1934 年簡体字に関する論文を発表した週刊は二十余種類，新聞の付録は十余種類あった。出版した専門書は陳光垚氏の「簡字論集」（1930）と「続集」（1933），徐則敏氏の「常用漢字研究」（1931）等があった。
(74) 1935 年 2 月24日の「申報」参照。
(75) 陳光垚氏は 1955 年に又「常用簡字普」を出版した。
(76) 呉玉章等著,「漢字簡化問題」p. 98. 「798 個漢字簡化表草案」は p. 101 参照。
(77) 呉玉章等著，前掲書 p. 99. 「擬廃除 400 個異体字表草案」は p. 105 参照。
(78) 呉玉章等著，前掲書 p. 108 参照。
(79) 1955 年 5 月 1 日より第一群57字を試用し，8 月15日より第二群84字を試用し，1956 年 1 月 1 日より第三群 126 字を試用した。計 261 字であるが，その中簡略化第一表 230 字が含まれている。
(80) 第二表に関しては，1956 年 6 月 1 日より95字を，1958 年 5 月15日より 70字を，1959 年 7 月15日より92字を，合計 257 字を押し進めた。
(81) 中国語文学社印行,「語文彙編」第三十七輯 p. 26.
(82) 中国語文学社印行，前掲書第二十七輯 p. 35.
(83) 曹夫昂著,「文字改革工作問答」p. 23，24. 簡略化方式の分類は学者によって異なる。ここではもっともわかり安い一般的な方法で分類したものである。
(84) 周有光著，前掲書 p. 341，342.
(85) 周有光著，前掲書 p. 343.
(86) 易熙吾著,「文字改革論集」p. 99.

(87) 呉玉章著，前掲書 p. 93.

(88) 拙著，「最新中国語会話基本句型」p. 97～99.

(89) 韋慤氏が言った文字改革四原則は，①民族式②正確な発音③簡便な筆画④美観であること，ゆえに「美」を失わないことも大切である。

(90) 易熙吾著，前掲書 p. 100.

(91) 江頭数馬著，「中国の文化と教育」及び拙著，前掲書 p. 103 ～ 106.

(92) 中央学院大学論叢15巻 2 号“「中国文学拉丁化」の理論について“ 参照

(93) 李中昊著，前掲書 p. 213.
張周編写，「簡化漢字的好処」p. 12，14.
黎錦熙著，前掲書 p. 72，73.
呉玉章著，前掲書 p. 92.
呉玉章等著，前掲書 p. 28（魏建功氏の意見）
さねとう・けいしゅう著，「中国の文字改革」p. 110.

(94) 張周編著，前掲書 p. 2.

A Phase of the American Language

——With Special Reference to Its Informality and Dynamism——

Satoshi Yomota

America, as everyone knows, consists of races of many origins. Thus, the American language, which I venture to say, spoken in mixed society, could be said to appear before us in varied aspects. In America, the multi-racial country, people would have to use expressions as informal, plain as they can so as to facilitate mutual understanding among them.

Also, the disparity between the environment and traditions of the American people since the seventeenth century and those of the English, that is, the tendency to seek freedom from restraint of the traditions of England has been the main current of the American people's humour.

And these would seem to be the most important of the facts which could give impetus to the existence of "Americanisms."

Some discoveries were made by the classification of materials collected from today's American literary works, magazines and newspapers.

So I classified them into five sections:

(1) Swear Words (2) Number (3) Conjunctions (4) Frequency of Mixed Narration (5) Word-Order of Reporting Verbs.

In addition to these, the flat adverbs frequently used by American writers

like Hemingway and many others, to say nothing of Mark Twain, are the proof of sensuous qualities peculiar to the American language.

To sum up, the American language could be characterized by its informality and dynamism.

In the present paper, I might as well venture to say,

I endeavored to deal with the American language, concerned mainly with some linguistic features which had not yet been touched upon so much by the scholars.

THE TOMB OF SOUL

Touichi Izawa

We can still enjoy a beautiful landscape of rustic area along the Mincio in the suburbs of Mantua in Italy. Virgil, one of the greatest ancient poets, sang in praise of his own country in his *Eclogues*. From then on, the rural area along the Mincio has been compared with Arcadia, the ideal land for herds in ancient Greece.

Orpheus, a Thracian mythological minstrel, appeared three times on such a pastoral stage; first he appeared in *Georgics* IV by Virgil, the second in a pastoral drama titled *Favola d'Orfeo* by A. Politian, and the third on the stage of the earliest opera by C. Monteverdi. However, he is originally not a shepherd, though a musician, and Orphic myth can't be a pastoral story because it doesn't form the alegiac style. Nevertheless theses appear in a pastoral atmosphere. This article, however, doesn't aim to make clear the relation between these Orphic stories and the pastoral, a genre of poetry, but the structure of ancient myth of Virgilian Orpheus.

First of all, music connects Orphic stories with the pastoral. I.M. Linforth reports, in his chronological study on Orphic literatures titled *The Arts of Orpheus*, that the earliest Orpheus appears as an Argonaut and a great minstrel of lyre. Then we'll find the earlier records which report the tragic Orpheus being torn to pieces by Bacchic women. Love stories of Orpheus and Eurydice can be found in the last group of records, but in the underworld she appears as the dead rather than a lovely wife of his own. We should assert

that the main factors of the ancient Orphic myth before 300BC are fundamentally the music and death.

Most well known Orphic story told by Virgil is also fundamentally con structed with these two factors, though we cannot disregard the factor of love. The deed of looking back at her leads the interruption of music. It causes both lovers to realize that the only acceptable form of existence as a human being is whether to be alive or dead; in other words, musical song or poetry is the only way to transcend the limitation of human being. Plato called it "a madness," which is indispensable for men to contemplate the Idea that is the ultimate substance in the world. All the reason for mortal beings to get is to set souls free from the tombs of bodies and to contemplate the ultimate Idea.

But the liberation of souls from human bodies means, as Plato suggests, the death. Therefore we can say music is something to promote the human death. If mortal Orphues had not concealed his body and pretended as a mere spiritual-being without any flesh, he could not have adventured to go down to Hades. But he revealed his body by looking back at Eurydice with his eyes being a part of human body. It is natural that the gods should have destroyed his body by tearing it to pieces; for it might be prohibit that any human being having a body keeps alive in a realm of gods. To sum up, the ancient myth of Virgilian Orpheus may be decided to symbolize the mystery of soul and body.

The Historical Meaning of the Simplification of Chinese Characters

Der-Shing Zeng
(Tokukō Sō)

"The simplification of Chinese characters Bill" was anounced officially by the Chinese Government in 1956. From then on, a lot of disputes on the problems about the simplification of Chinese characters have risen.

But the problems as to how to simplify difficult Chinese characters not only exist in modern history but also did in ancient history. When we read the history of Chinese characters, we can find some different writing styles from the same word (or same meaning) in the age of "Yin Zhow ancient writings." All of those different writing styles we may call "the simplified writing style". These facts in history tell us that the problems about the simplification of Chinese characters existed in the early ages when Chinese characters came into being.

In this paper, I am going to consider the change of Chinese characters from a historical standpoint. Then I am going to find some historical facts about the simplification of Chinese characters.

Finally, I am going to try to advance a theory on the development of Chinese characters.